# 渦巻く、その始まりの淵に

綾瀬千準

瀬戸内に面した四国でも、冬はやっぱり寒い。寒いだけではない。二月の午前五時は、まだ夜中だ。

鋭利な刃物のような冷気を裂くように、真雪は自転車を走らせる。荷台では、牛乳瓶のカチャカチャとぶつかる音がしている。橙色の裸電球の下に自転車を止め、荷台から牛乳を抜き取ると、配達先の玄関まで坂を駆け下りた。

今日は、特別な日だ。一年で、たった一日しかない日。真雪は、鼻から、口から、その兆しを思い切り吸い込む。毛穴の強く閉じた全身の肌の毛先まで研ぎ澄ませて、それを感じ取る。

この村全体を、いや、その隣の村も、また隣も、市も郡部もすっぽりと覆い尽くしているそれが、いったい何なのか、知らない。気配のような、匂いのような、それとも時の一部なのか。今朝は昨日の朝と変わらず、明日の朝とも同じ、二月の初めの一日でしかない。それなのに、家から一歩踏み出したその瞬間、真雪は気づいた。

ああ、来たんだ春が…。

両手いっぱいの金の鈴が転げ散るように、胸の底から喜びが拡がった。夜明け前の闇の中で、爆ぜたように目醒めたそれは、凛としてこの地を覆い尽くしている。清浄で無垢な花の匂いにも似ている。

去年の暮れに十二歳になったけれど、真雪は今だに明け方の闇が怖い。石鎚の峰から神々しく吹き上がってくる朝陽がいつも待ち遠しい。けれど、今朝は違う。太陽の光に射されると、何故かたちまち溶けて消えてしまう、時の密かな営みを、ずっといつまでも感じていたかった。

神社の広場を右折したところで、新聞配達のお兄さんとすれ違った。お兄さんは今が特別な朝であることを少しも気づいていない。お兄さんだけではない。両親や祖母も、皆忙しく立ち働いているが、やはり誰も気づかない。そして、村中のほかの人たちは最後のまどろみの中にいて、決して気づくことはない。

自分だけが、それを知っている。自分しか、それを知らない。心ときめくようだけれど、どこか面映く、気後れする感じだ。

空き瓶だけになった配達箱を入れ替えに家に帰ると、母の豊子が次々と牛乳瓶を詰め替えていた。もう一度自転車を漕ぎ出そうとしたとき、真雪はふと振り返って母親に云った。

「今日、春が生まれたんよ」

豊子は作業の手を止め、戸惑ったような顔をした。

母親を怪訝な気持ちにさせたことで、真雪はなんだか得意気な気分になって、勢いよくペダルを漕いだ。

真雪が牛乳配達をするようになったのは、小学校二年になるその日からだった。

「お前も、明日から牛乳配達をせい」

父の明勝が、前夜に厳しく命令を下した。父親の意見は絶対だった。

翌朝から、午前五時丁度に叩き起こされ、明勝の自転車を追って、真雪はひたすら走った。道順と、どの家に何牛乳を何本配るかを覚えると、それからは牛乳壜の詰まった大きな買い物籠を持たされ、別々に配った。何箇所かの合流地点に一分でも遅れると、厳しく叱咤された。明勝が怒鳴らずに待てるのは、十五秒までだった。

この前津の村は、空襲で焼かれなかったため、自転車できぎりぎりすれ違える小路が、網の目のように綾なす迷路である。その辻ごとに小さな祠が祭られてあり、街灯も少ない。村全体が重く凝縮されたような闇に沈み、祠の周囲はことさら異質の闇が深い。父親と別れて走る暁闇の道は、八歳の真雪の深部に強い恐怖を叩き込んだ。

ことに、老人が首を括って死んだという噂のある、廃屋の周囲を走るとき、真雪の足は緩い沼地に踏み込んだようになった。黒々と庭木の聳え立つ広い屋敷を高い塀が取り囲み、塀に沿ってくねくねと曲がる細道を、真雪は決死の覚悟で駆け抜けた。息をすると、鼻から自殺したお爺さんの霊魂を吸い込んでしまいそうで、息を止めて走った。鼓動が激しく連打し、内臓が捩れ上がるようだった。死んだお爺さんもここまでは追ってはこまいと思うほど走ったところで、速度を緩めて吐き気を堪えた。立ち止まったら数秒遅れてしまい、また怒

鳴られるから、動悸が治まらないまま、さらに走った。
真雪が自転車を漕ぐごとに、一年に一度の朝はゆるやかに明けていった。村が明るんでいくにつれ、立ち込めていた清廉な気配もどんどん薄らいでいった。村の外れの高台で、自転車に跨ったまま、真雪は朝陽が昇る瞬間を見届けた。

一時間目が終わった休み時間、両耳の横に括った真雪の髪の分け目を、後ろから指がすっとなぞった。首を竦めて振り向くと、友達の美知が悪戯っぽく笑っている。
「まあちゃん、今月号のマンガ読んだ？」
掬い上げるような視線で真雪の目の色を窺っている。小学生向けの月刊誌に載っていた少女漫画のことを訊いているのだとすぐ分かった。せむしの女の子とお母さんの話だった。「あ、うん」
真雪は微妙に言い淀んだ。
背中に瘤のある少女は、外に出るときは必ず母親と一緒だ。皆が自分を振り返って見るのが不思議でならない。自分の瘤のことをまったく知らなかったのだ。お母さんは人に見られる度に、長い睫を伏せて悲しそうな顔をした。どうして、みんな私を見るのかしらと訊ねる少女に、お母さんは、あなたがとても可愛いからよと答えた。しかし、少女はある日ついに自分の背中の瘤に気がつく。衝撃に打ちひしがれた少女は、そのまま寝ついてしまった。瀕死の少女の瘤の中から、純白の翼が現れた。少女は天使だったのだ。そして、光の中を静かに昇天していった。そんな話だった。少女は、大きな瞳に星の光るあどけない顔に描かれていた。
真雪は、背中の左側だけに瘤がある。脊椎側湾症という背骨が横に歪む病気のせいだ。湾曲の角度が八十度以上あり、ゆったりした服で体型を隠しているが、背中の変形もかなりひどい。
美知は真雪の傍に寄り、その背中に手を当てた。そして熱を帯びたような目で真雪を見つめ、小さく囁いた。
「まあちゃんのここにも、天使の羽根が入っとんよ」
真雪は心臓がことんと鳴って、目の周りが赤らむのを感じた。美知に感謝した。

でも私は天国には行けない。片方だけしか羽根が無いかもしれないから…。

給食が終わると、真雪はいつものように早退した。指圧の治療を受けに行くためだ。学校には病院に行くといってあった。指圧に行くなどと言ったら、皆に笑われるだろう。男子たちは面白がってどんな風にからかってくるかわからない。お婆さんが施術しているそこは、バスと電車を乗り継いで片道一時間以上かかる。

車窓の景色をぼんやりと見ながら、真雪はいつも解放感と同時に一人ぼっちで堕ちていく気分に沈んでしまう。整体や指圧、何か得体の知れない治療院に通い始めたのは、小学校に上がってからだ。母の豊子が体に効きそうなところを人づてに探しては、効き目が無いことがはっきりするまで通わせた。午後から早退するため、真雪は昼休みも放課後も友達と遊んだことが無い。そのせいかクラスにしっくり馴染めず、どこかお客さんのような、一人前に見られないような立場になってしまっていた。

電車の駅からお婆さんの家までは、吹き曝しの畦道を避けて、高いブロック塀が続く水路の脇を歩いた。弱い陽の照り返しの中で、真雪は昨日提出した宿題の詩のことを考えていた。先生に題名を訊ねられ、『病院通い』と答えると、「お、真雪さんのは、ええ詩ができそうじゃな」と、期待の混じった目で皆に告げられた。真雪は困惑した。まさか注目されるとは思わなかった。他に何も思いつかなかっただけだ。

毎日の病院通い
待合室にいるあいだ
わたしはいつもドキドキする
適当なことを書いた。
次はわたしの番だ
少しでもよくなっているかな

待合室なんか無い。十畳ほどの座敷に布団が敷いてあり、順番を待つ客は障子の前に並んで座っている。真雪がうつ伏せに寝て背中の瘤が盛り上がると、初めて見る客は溜息のような驚きの声を出し、得意なのか不愉快なのか分からない妙な気分になった。

キュー、キューと細く甲高い音がして、真雪は立ち止まった。水路で泥だら

けの子犬が鳴いている。茶色の柴の雑種だ。屈んで手を伸ばすとおとなしく掬い上げられた。真雪はタオル地のハンカチで濡れた体を拭いてやった。子犬は鳴きやんだが、電池入りの玩具のように振動している。その止まらない震えに、真雪の胸の方がキューと泣きそうだ。

待っていてドキドキなんかするわけがない。もう、二年以上も通っているし、最初のころは「この子だけは、何としても治してやりたいんよ」と勢い込んでいたお婆さんも、今では惰性で指が動いているだけなのを、真雪はもう分かっている。

先生は真雪の詩を一読すると、はっきりと落胆の表情になった。真雪は気づかないふりをした。

皆が学校で勉強しているときに、毎日自分だけ抜け出してこんな所にいる。西の果ての海端の村から、遠く離れた山の麓の村まで来て、野良の子犬を撫でたりしている。

田圃の泥の上にいるように頼りなかった。田圃ではなく、底なし沼かもしれない。もう、取り返しのつかない所まで沈んでしまったかもしれない。笑いさざめく皆のいる明るい教室は、おぼつかない冬の太陽より高い天空にあった。

真雪の背骨が歪み始めたのは、四つくらいの頃からだ。側湾症を専門的に診ることのできる病院は、県内には無かった。小学四年から五年にかけて、九ヶ月間、隣の県にある大学病院に入院した。湾曲は止まらず、夏休みに外泊で帰ってきたまま、真雪は病院に戻らなかった。

そのころから、家には不文律ができた。真雪の背中のことは考えないことにする。真雪が体調の不良を訴えると、父の明勝の逆鱗に触れた。豊子は宗教にはまり込み、同時に様々な商売に手を出し、家のことはないがしろにした。両親は不仲になり、明勝は出勤すると仕事が退けても遊び回り、牛乳配達のためだけに明け方帰宅した。

昼休みが終わり、一斉に掃除が始まった。皆がそれぞれの持ち場へ散っていく。真雪は所在無く、二階の窓から中庭の池を眺めていた。お婆さんの指圧所は法事で休みだった。早春の陽が、水面で生きているように踊っている。小さ

な光の玉たちは、はしゃぐ赤ちゃんのようだ。
「お前、ちいとはバケツ運びでもせいや」
いきなり男子の鋭い声が響いた。
振り向くと、男子の中で親分格の辰彦が真雪を睨みつけていた。真雪はその体のせいで、掃除はすべて免除されていた。
辰彦は黒板に向かうと、チョークで大きく乱暴にCの字を書いた。
「背骨が、こう曲がっとんじゃろが」
意地悪そうな目が、強い意思を持って光っている。
「右手で持たずに左手で持つんなら持てろが」
「病院で、重いもんは持ったらいかん言われとるけん」
辰彦は忌々しそうに舌を打つと、矛先を変えた。
「お前、牛乳配達しよんじゃろが。そんなんができて、何でバケツは持てんのぞ」
どんと胸を衝かれたようで、真雪は黙った。ほうよ、ほうよ、と事あるごとに嫌味を言ってくる数人の女子が仲間に加わった。あんた、体育も見学しよるやろ、牛乳は重たないんか、自転車にも乗れるんやろ、報酬貰いよんやないの、と口々に追求し始めた。
閉じ込めていた疑問が、不穏にざわめこうとしていた。なぜ、牛乳配達をするのか。うちが牛乳屋だからだ。働かざるもの食うべからずじゃ、と父がいつも言う。お金なんか一円も貰っていない。父が配達箱を括りつけて、行くぞーと怒鳴るとき、表に走り出ていなければ、激しく叱咤された。反抗する気など持ったことが無い。
目を伏せたまま一言も言い返せない真雪に、辰彦は、「こんなやつ、ほつとけ、ほっとけ」と言った。皆が真雪の周りを去った。
とぼとぼと歩く自分の爪先を真雪は見つめていた。
父は勿論怖い。逆らうなどもっての外だ。けれど、父に従うのはそれだけではなかった。　明勝は、子供のころに両親を失い、一面識も無い四国の親戚の家に預けられた。戦時中のことだから、預けられた方も大迷惑だったはずだ。そして鴻ノ沢家にも、婿養子として入った。真雪の祖父は地元の有力者で、また強い信仰者としてカリスマ的な人物だった。さすがの負けず嫌いの明勝も、

その義父には頭をがっしりと押さえつけられていた。
真雪は物心ついたころから、明勝だけが家の中でどこか異質な存在だと肌で感じていた。箱入り娘で気働きのきかない豊子では、明勝の背負ってきた苦悩を受容するのは無理だということも。
父親から信心を叩き込まれている豊子は、明勝がどれほどそれを嫌悪し、喚き回ろうが
頑として言うことを聞かず、すべてに信心を優先した。
その義父が癌で岡山の大学病院に入院してから、明勝は俄然生来の勝気を剥き出しにした。まず真雪を牛乳配達に駆り出し、スパルタで鍛え始めた。また、拝めば何でも治ると信じている義母と豊子に、うむを言わさず真雪を県外の病院へ入院させた。真雪だけは、自分の思い通りにしようとした。そして、真雪もそれに応えたかったのだ。
お父さんを幸せにしてあげられるのは、自分だけだ。
私が、お父さんの砦になる。生まれてきてよかった、生きとってよかった、そう思えるように、私がずっと尽くしてあげる。
運動靴の爪先が小石に当たり、勢いよく転がった。真雪はそれを見失わないように、ゆっくりと蹴りながら歩いた。

「マァキー、マァキー！」
隣の部屋で、娘の夏苗が呼んでいる。
真雪は仰向けに寝転んだまま、首だけ夏苗の方を向く。
夏苗が、水色にグレーのチェックのミニスカートと、Tシャツを掴んで駆けてくる。
「このスカートの上は、どのTシャツがええかなぁ。朝は寒いけん、その上にパーカー着て行こわい。それにソックスは、この間マァキーが買うてくれた、グレーと黒の、あの、あの…」
夏苗は興奮のあまり言葉をど忘れし、両膝を直角に折って開くと、両手の人差し指と親指をくっつけて、手と足で二段の菱形を作っている。お笑いの一発ギャグのようだ。

「アーガイル」

真雪が助け舟を出すと、「そうそう、菱形の柄のそれ履いて行こわい」と笑った。

「清楚な感じにしたいんよォ」

「清楚な感じなら、上は白やね。オフホワイトのサマーセーターあったやろ。白に水色、決まりやね」

「あんまりシンプル過ぎるんも、ちょっとねぇ。夏苗としては、こっちのベージュのロゴTの方が…」

言い切った真雪に遠慮するように、夏苗は自信無さ気に云う。ベージュのTシャツ、水色の襞スカート、上にはダークグリーンのパーカをはおる。その、若竹を思わせる細身の夏苗の姿を真雪は脳裡に描く。アーガイルだけがそぐわないが、言わない。

「なるほど、いいね。うん、それがええわい」

承認されて、夏苗は小躍りし、また笑う。

「夏苗のコーデはバッチシなのだ」

明日は地元の秋祭りだ。中二になった夏苗は、初めて神輿の宮出しから宮入まで、友達と一緒について回ると張り切っている。

臆病なうえ、世渡りも人付き合いも不得手で、小学校から中一まで、毎年誰かの苛めの対象になってきた娘である。

夏苗が自室に引き上げたのを見計らって、真雪は寝たままじっくりと深呼吸を始める。　細く静かな息をたっぷり十五秒ほどかけて鼻腔から吸い込む。蜘蛛の糸のような、繊細で切れ目の無い息だ。体の左半分を占領している根強い痛みに向かって、特に左側の肋骨が変形して大きく膨らんだその深部に、意識を集中して糸を流し込んでいく。

たっぷりと、はち切れそうに満たされたら、栓で閉じるように息を止め、およそ十秒、胴体をボトルにして中で巡らせる。淡く光る液体が、嬉々として体内で遊びまわり、中で凝り固まっている滓を抱き止める。それが喉元までせり上がってきたら、蚕になって、また、長く長く糸を吐き出していくのだ。六回目の呼吸を終えるころ、鉄球のように重く頑固な痛みが、緩やかにほどけていった。

真雪は傍らのコルセットを片手で引き寄せ、背中の下をくぐらせて広げると、三段のマジックテープを締めて固定した。両手をつきながら、息を吐いて止め、吸って止めをくり返しながら、徐々に体を起こしていく。垂直に体を立ててから、しばらくは呼吸ができない。体を起こしているためだけに大変な努力がいることを、夏苗でさえ本当には知らない。「生まれたときは、どうもなかったんじゃけん」

母の豊子の声が、まるで傍にいるように真雪の中に拡がって消える。

脊椎側湾症にもかなり詳しいという、県内にできた総合病院で診てもらったのは去年の夏のことだ。病院を離れた小学校五年の夏から、ゆうに三十五年が経っていた。

「百五十度から百六十度の湾曲だけど、あんまり酷いから測定不可能！」

レントゲンに定規を当ててから医師は云った。

体の前面から撮ったレントゲンの背骨は、首の下辺りから平仮名の『つ』とそっくりな形に大きくひしゃげて骨盤に繋がっていた。

「横に曲がっとるだけじゃなく、骨盤が左から右に、ぐうっと、こう捩れとるね。歪みだしたんが四歳頃からとすると、先天性やね。生まれつき背骨のどこかに、何かの欠損があったんやろうね」

医師の視線が真っ直ぐに真雪の瞳に入った。それを深奥まで受け入れることができず、真雪はとっさに目の焦点をぼやかせた。

生まれたときはどうもなかったんじゃけん。

豊子の口からその言葉を何度聞かされただろう。生まれたときは健康体だった。それは子供の真雪に、申し訳なさと救われるような思いとを同時に起こさせた。

五体満足に産んで貰った体が、何のはずみかこんな奇病に罹ってしまったという気後れであり、不具者ではないという最後の救いを与えられたような安堵感だった。昭和三十年代の始め、四国の小さな田舎町で、障害児とその家族が暮らすのは悲劇以外の何でもなかった。

夜明け前の闇の中で、春は生まれる。毎年、毎年、新生する春を、地球の公

転と逆に遡ったら、いったいどこに行き着くのだろう。
真雪は夢を見た。
無音の 世界だった。音の収まった後に静寂があるのではなく、音の無い茫漠と拡がる空間に静止して浮いていた。足元には巨大な渦がとぐろを巻いていた。竜巻の真上、その淵の上空に立っているのだった。ふたりで。
竜巻に似たものは泥のような灰褐色をしていて、轟々と唸りを上げるように渦巻き続けていた。しかし、音はやはり無いのだ。
―ここが、歴史の始まりです
一緒に立っている人が、真雪にそう教えた。真雪もその人も、ただ粘土でできたような人型をしているだけで、顔はおろか髪の毛も服も何も無く、個体が二つあるというだけだった。だからその人は口を利いて教えてくれたのではない。想念で伝えてきたのだ。
そうか、この淵が歴史の始まりなのか。すると、現在の自分が生きている時代は、いったいこの渦のどれほど先になるのだろう。真雪は渦の中を覗き込んだ。
渦は捩れ、廻りながら、気が遠くなるほど先へ先へと続いていた。ここからは、あまりに遠いその現代は見えない。その遠い現代よりも、歴史はさらに渦巻きながら未来永劫に続いていくのだ。
寂しいのか、恐ろしいのか、哀しいのか分からない思いで、ただ粛然と見つめていた。
薄皮からつるりと抜け出すように、真雪は目を醒ました。明日は中学の入学式だった。

村に一つの小学校から中学校へ、同じ顔ぶれが揃って入学した。しかも同じ敷地内である。
しかし、そこは真雪にとって別世界だった。中学校の教師は、同じ教員とは思えないほど、小学校の先生とは人種が違っていた。小学校の先生は基本的に温厚で、真雪のような弱い子供は、特に注意を払って保護してくれた。
中学の教師たちは、生徒を色気づいた反抗期の未熟な大人として扱った。生徒は常に、学校や親や世の中に不平不満を抱え、青臭く反抗しているものとみ

なして、冷めた顔つきで高圧的に押さえ込んだ。学校にも、親にも、世の中にも、何の不平も矛盾も感じていなかった真雪は、面食らってただ脅えた。

ときに、妙ににやつきながら、好きなヤツはいるかとか、失恋したのかとか、生徒に擦り寄って聞きだそうとしている教師を見ると、幻滅して落ち込んだ。

教師の思い通りの、反抗的で色気づいた生徒たちは、陰で口汚く先生の悪口を言いながら、先生の前では、男子がどうの女子がどうのと、にやけながらじゃれ合っていた。

真雪は、担任の教師には公然と○、五人と数えられ、体育の教師には、特殊学級へ行けと言われた。仲のよかった美知は、少し病弱な色白の美少女に熱を上げ、真雪は学校で独りになった。

前津で生まれ育ったものでも、入り込んだら迷うと言われる村中の辻で、真雪は本当に道に迷った。毎朝走っているのに、何故分からなくなったのか。真雪は家からの道順を思い起こしてみる。水の上でふやけて散り散りに避けていく地図のように頼りなく、ここまでの景色があやふやになる。まだ半分も牛乳が残っているのに…。夜が明けて日が高くなると、牛乳が腐ってしまう。焦れば焦るほど、辺りがおぼつか無くなっていく。ほら、もう日が高い。腐ってしまった牛乳。取り返しがつかない失敗。学校がもう始まっている。大変だ。一時間目が体育なのに。体育の教師の前で、口が膠で貼りついたように動かない。

沼の底から引き摺り上げられたように、真雪は目が醒めた。

汗でぐっしょりと濡れたパジャマを着替えていると、夏苗が学校から帰ってきた。

「夏苗ぇ、おねがーい」と声をかけると、鞄をどすんと下ろす音がして、しょうがないなぁと言いながら、夏苗が部屋に入ってきた。

ごい、ごい、ごいと、ふいごを踏むようにリズムをつけて、夏苗が真雪の背中の瘤を踏む。一度風邪を引くと、元々胃の弱い真雪は、風邪薬に傷められて軽く一月は苦痛が続く。毎日の呼吸法も、どんな胃薬も、こうなると効き目が無かった。

体の盛り上がっている部分は背中だけではない。腋の下から左胸まで、肋骨

が大きく膨らんでいる。その左半身の、深い奥の部分が疼き続けるのは、単に体の痛みだけではなく、精神的になぶられているように堪えがたい。その瘤を絶妙な角度と力で踏んでもらうと、堅固な凝りが僅かに弛んでくれる。夫が編み出した技だが、去年までの頼りない夏苗では無理だった。一年でめっきり力がつき、足を踏み外したりよろけたりせず、五十回近く踏めるようになった。

夏苗は通販のチラシを片手に、踏みながら、芝居がかって読み始めた。

「百足、限定品！一針、一針、心をこめた、手縫いのパッチワーク。世界にただ一足の靴で、ステキなシンデレラ気分…。カッコ頑丈に縫っていますが、万が一、ほどけたときには、責任は一切負いかねます。自分で縫ってねカッコトジル。胸元を彩る、華麗なカッティング！裾周りの華やかなライン！颯爽と歩けば、貴女も、最高に、勘違い、した、白、金、マダム…！」

いったい、どこまでが本当のコピーで、どこからが夏苗の作り事なのか。真雪が笑い出すのと、夏苗が音を上げるのが同時だった。

「ああ～しんど。もう、ええ？夏苗も疲れとんよ」

学校から帰ってくるのを待ち構えていてねだったのだから、贅沢は言えない。ありがとうと言って仰向けになると、体操の半ズボンを履いたひょろ長い足が二本、天井に向かって伸びている。

「あれ？夏苗、ちょっと、ちょっと」

真雪は慎重に点検した。

「やっぱりぃ。右の太腿の方が、左よりちょっと太なっとる」

「えーっ！うそォ」

夏苗が最敬礼体制で自分の足をチェックし、さらにスタンドミラーの前に駆け寄って、ほんとやー、と叫んでいる。体のラインを異常なまでに気にする年頃だ。よく今まで気がつかなかったものだ。

「いっつも、マァキーの背中、踏みよるけんかなあ…」

放心気味に、夏苗が云う。

「こんな親孝行な娘、ほかにおらん？」自己陶酔している。

「う～ん。マァキーは、お父さんにすっごい尽くしたけんねえ。お父さんが会社から帰ってきたら、足と背中と腰、毎日一時間かけて揉んであげるんが日課やったんよ。夏苗みたいに、頼まれたときだけじゃなくてね」

夏苗はがっかりして、小鼻の横をへこませた。
「ほいでも、夏苗の年で、こんなに親孝行な、ええ娘はおらん。うん、おらん、おらん」　夏苗はあっさりと機嫌を直し、にかっと笑う。
「マァキーは背中がこんなやろ？ほじゃけん、お父さんに指圧してあげるんが、体にすごく堪えよったんよ。揉んであげたあと、背骨の左側の凝りが鉄板みたいになって、吐き気がするくらいやった。お父さんには言わんかったけどね」
「マァキー、祖父ちゃんのこと、ほんとに好きやったんやね」
「うん。それに、自分が守ってあげんといかん、思っとったんやね。夏苗の祖父ちゃんは、生い立ちが不幸せやったけんね」
真雪は、ごそごそとコルセットを装着して起き上がった。
「祖父ちゃんはね、戦時中にお父さんも、お母さんも亡くしとるんよ。そのとき、まだ小学生やったんやと。ずっと九州に住んどったんやけど、会うたこともなかった親戚の家に、妹と二人で預けられたんやと。ほれで四国に来たんやと。
上の兄さん二人は、もう大人で戦争に行っとって、姉さんと弟は他の家に引き取られてね。祖父ちゃんと妹は、ちょうど『火垂の墓』みたいなもんやね。お盆にテレビでアニメ観たやろ」
「祖父ちゃん、あんなえらい目ぇに合うたん？」
夏苗が目を丸くした。
「追い出されはせんかったけど、あの状態にかなり近かったと思うよ。空襲警報が鳴って、村中が防空壕に逃げるとき、叔母さんに、明勝さんは家で留守番しよいでな、言われて、防空壕に入れてもらえんかったらしい。要するに、あんたは弾に当たって、早よ、死んでくれた方がええってことよね」
夏苗の顎が玩具のようにかくんと開いた。
「その叔母さんちに、祖父ちゃんの妹と同い年の娘がおって、学校で学費を集めるときに、叔母さんに学費下さい言うたら、叔母さんが自分の娘に確かめたらしい。娘は学費のことうっかり忘れとって、そんなん聞いてない、言うたもんじゃけん、叔母さんが怒って、怒って。この嘘つきの泥棒が、言うて、下駄で死にそうなほど殴りつけたんやて。祖父ちゃん、それじっと見よったんや

と…」

「えー、辛かったやろうね」

「そうやろうね。自分しか守るもんがおらんもんを、目の前で半殺しにされよんやけんね。

毎日、学校から帰ったら、夜まで畑仕事して、勉強なんかする暇が無いけん、真夜中に、眠たなったら冷たい水で顔洗って、こっそり勉強しよったんやと。それで、ずっと成績が学年で一番やったんと。ほじゃけん、祖父ちゃん、小学校しか出てないのに、頭ええやろ」　夏苗は居心地悪そうに、座ったお尻をもぞもぞさせた。

「それでもね、やっぱりすごく辛かったけん、六年のとき、死のうと思って、『猫いらず』飲んだんやって」

「猫いらずって何？」

「鼠を殺す毒よ」

「えー！祖父ちゃんどうなったん？」

「マァキーが生まれとるってことは、死なんかったってことよね」

「はぁー、よかったねぇ」

夏苗は全くもって健全で、単純で、思い通りの反応をする。正座した夏苗は瞳を潤ませ、観音様のような微笑を浮かべて、両手を大きく広げた。真雪が夏苗の膝に乗り、ハグをする。

夏苗が小一のとき、真雪は座高を追い抜かれた。こういう、思わず抱き合いたいときには、いつからか、夏苗が真雪を抱く姿勢になってしまった。

「祖父ちゃんが死なんかって、マァキーが生まれてこれてよかったねぇ」

話の流れから、うん、と応えそうになって、真雪は喉に芋の塊が痞えたようになった。うん、そうやね、生まれてこれてよかったと、どうしても言えない。

真雪は小学校のとき、父に同じことを訊ねたことがある。

父の体を丹念に揉み解すと、人心地ついた父が、実際には無いカップのつまみを片手に持ち、くいっとあおる仕草をした。続けて、高校野球の監督のように、肩、口、胸をポンと打って、片手を払って行けと指令を出した。『コーヒー入れてこい』のブロックサインだ。父がにんまりと笑っている。真雪は、野球帽のひさしに手を当てるふりをし、笑い返すと台所にたった。

インスタントのコーヒーをごくりと呑み込むと、あー、と さも美味しそうに、父は息を吐いた。幸せそうなその顔を見て、真雪は思い切って父に訊ねた。
「お父さん、死のうとしたとき、死なんかって、よかった？生きとってよかった？」
父の顔からたちまち笑みが消えて、複雑な表情になった。口を結んだまましばらく黙り、んーと、意味の読めない声を漏らした。
肯定でも否定でもなかった。否定はしないが、生きていてよかったと思えるほどに、今、幸せではないのだ。真雪は、込み上げてくる悲しみを全身で呑み込んだ。
私がもっと尽くさなければいけない。もっと、もっと…。

明勝は、スパルタを美学だと信じている、軍国主義から抜け出し損ねたタイプだが、決して陰湿では無い。ただ、怒りの沸点が低い上に、その位置が常にあやふやで、たった今上機嫌で大笑いしているかと思えば、一転して激昂する対処の難しいところがあった。その顔色を刻一刻と窺っている真雪にさえ、いつ、何によって逆鱗に触れるか計り知れない危うさがあった。しかし、あくまで外から見た明勝には、秋晴れの空のような突き抜けた明るさがあった。人の集まりに明勝が加わると、場が俄かに活気付き、すぐ笑いが起こった。
明勝はよくリビングの大きな鏡の前で格好をつけ、「ほじゃが、わしは男前じゃあ。自分でも惚れ惚れするがぁ。どうじゃ、映画俳優みたいじゃろが？」と悦にいっていたが、そこそこに美男子だった。
「そんな、足の短い映画俳優おらんわい」とからかうと、二枚目気取りで顎に親指と人差し指を開いてあてがったまま、吹き出しておどけてみせた。
真雪はその父に似ていると言われると誇らしかった。どこではぐれても、一目見たらこのお父さんの子じゃとすぐに分かるわい、と皆に言われ、明勝は我が意を得たりと相好を崩した。
「真雪は、大きなったらスチュワーデスになりたいんか？おう、顔は、ええわい。誰に似たんかいのう。ほじゃが、こっちの方がちょっと心配じゃあのう」と、頭の横をつついては、嬉しそうにした。真雪はその父の顔を見るのが好きだった。スチュワーデスにも、別の何かにも、なりたいと思うことはなかった

が、そう言うと明勝が喜ぶので、そんな天真爛漫な子供のふりをした。
午後の授業をまったく受けていなくても、テストの前に教科書を一度読めば頭に入るので、真雪の成績はそう悪くはなかった。作文でも、絵でも、賞状は山のように貰った。真雪は、いつでも両親にとって自慢の娘でいるために、最大限の努力をした。

「祖父ちゃんが死なんかったけん、マァキーが生まれてきて、それで夏苗も生まれてこれたんやろ？マァキーと夏苗が、せっかくこうやって出会えたんやけん。マァキー、よかったよねぇ？」
夏苗が懸命に食い下がってくる。
夏苗に自分と同じものを背負わせてはならない。
「うん、夏苗に会えたけん、よかった」
真雪は、胸の底で暴れだそうとする怒りに似たものを、無理矢理押さえつけた。
夏苗はやっと得心すると、顔中で笑い、部屋を出て行った。台所から、このゼリー食べてもい～い？と叫んでいる。

子供が産めるような体ではなかつた。結婚して家事がこなせるような体ではなかった。仕事ができるような体ではなかった。
それを親も、真雪自身も知らなかった。知らないから、健康体の者がすることをすべて、同じようにしないといけないのだと思っていた。真雪は背骨がちょっと歪んどるだけよ、と両親は事あるごとに言い、世間にも自分たちにもそう信じ込ませた。
真雪が何か人より劣るところを見せると、明勝は「こいつの背中が何ともなかったらのう」と心底口惜しがった。親戚が集まると、真雪の優れたところだけを殊更に自慢した。
学校を出てからは、真雪は働きに働いた。着物の帯の下に巻く、伊達巻二枚で体を締め上げて、会社に通った。胴体の骨という骨、細胞という細胞が粉砕され、内臓が捻り潰されるほどに苦しんだが、誰にも言わなかった。それを知られると会社は首を切る。

三十年を越す歳月が、真雪の背骨を文字通りじりじりと押し潰した。

母の豊子が、いつになく真剣な顔つきで正座している。真雪が高校から帰って、座敷の仏壇に手を合わせると、思い切ったように豊子は口を開いた。

「お父さんは、女の人の所におるらしいわい」

返事をしかねて、真雪は黙った。

「その人の住んどるとこも、大体分かった」

豊子は、元々大柄な体をさらに大きく聳やかした。取り乱す様子もない。それに、明勝に女の人がいるという話は、もう二度目だ。真雪が六年生のときにも聞いたことがある。「それで、お母さん、どうするん？」

「別に、ど～うもせん」

豊子は頭を昂然と上げ、少し蔑むように鼻で嗤った。

そうなのか、そういうものなのか。妻である母が何ともないのなら、娘の出る幕ではない。夫婦の、大人の問題なのだろう。

裏切られたのは、自分ではない。

愛されなかったのは自分ではない。

真雪は、もっとも触れてはならない部分を頑丈に梱包し、それを封印した。

ＤＮＡが二重螺旋を描いていることなど、中学の教科書には載っていなかった。真雪の遺伝子の中に、先天性といわれたその微細な欠損があるとしたら、未来の子孫の中に、いずれ、同じ形で受け継いだ者が 生まれ出てくるかもしれない。

真雪に、その責任を取ることはできない。真雪が生きて死んだ証が、何一つ残っていない、そんな未来にまでは。今よりもずっと医学が優れ、あらゆる処置によって、大した苦も無く幸せに暮らしてくれるかもしれない。

渦巻く歴史の始まりの淵に、本当に立つことができるとしたら、その中の塵の一つとして一瞬に生まれ消えていく己の一点を、真雪はしっかりと見届けなければならないと思う。もう一つの一点を自ら産み出した者の責任として――。

二月になったら立春の頃に、夏苗とともに五時前に起きてみよう。水も、土も、空気も昔とは変わった西暦２００３年に、春が生まれる気配を自然が教えてくれるかどうかは分からないけれど…。

<了>

# 渦巻く、その始まりの淵に

綾瀬　千準（あやせちはや）
本名　越智 敦子

〒791-8044　愛媛県松山市西垣生町一六一二番地
TEL(089)971-6058

昭和三十一年生まれ　昭和五十年済美高等学校美術科卒　五十一年松山デザインスクール本科卒　イラストレーター、デザイナー、アニメーター、営業事務員を経て　昭和六十二年結婚

四百字詰め原稿用紙換算　四十六枚